

横浜近代史を背負つてゝホテルニューグランド

山崎 洋子

1980年代から90年代にかけて、横浜の中心地には四つ星クラスのホテルが相次いで誕生した。横浜ベイシエラトンホテル&タワーズ、ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル、ヨコハマロイヤルパークホテル、横浜パンパシフィックホテル（現・横浜ベイホテル東急）など。それまで、横浜の高級ホテルといえは、文句なしにニューグランドだった。私など若い頃は、恐れ多くてロビーに足を踏み入れることすらできなかったものだ。が、新興のホテル群は客室数が多くて設備も最新。しかも、最先端エリアであるみなとみらいや、横浜駅西口という便利な場所にある。高級だがニューグランドのように敷居は高くない。観光客はおのずとそちらに流れた。

ニューグランドも黙って見ていたわけではない。1991年、タワー館を開設。客室数を大幅に増やした。2016年には本館を耐震改修してリニューアルオープン。2017年、めでたく創業90周年を迎えた。

そうこうするあいだに横浜のホテル競争はますます激化し、ビジネスホテルが林立した。2020年の東京オリンピック開催を控え、みなとみらい地区にはさらなる超高級ホテルが建つという。

が、どのようなホテルができようと、他が追従できないものをニューグランドは持っている。横浜近代史にぴたりと寄り添った、光と影のドラマだ。同じ頃、同じ使命を担って創建したバンドホテルはもうない。ニューグランドだけ

が、ずしりと重いその歴史を背負っている。

○

JR 関内駅の海側にあたる一帯は、「関内」と呼ばれる横浜の中心地だ。昔、ここは横に長い砂嘴^{さし}だった。沿岸流によって砂礫^{さく}などが運ばれ、堆積して形成された砂浜だ。そこに、横浜という半農半漁の村があった。いつごろで



ホテルニューグランド外観(現在)
ホテルニューグランド提供

きたのかはわからないが、現存する室町時代の古文書に、その名が登場する。少なくともその頃には、横浜と名のつく村があったのだ。この素朴な地に、1854年、

アメリカのペリー艦隊が上陸した。急ごしらえの応接所が建てられ、日米和親条約が締結された。日本が長い鎖国を解き、海外への門戸を大きく開いた瞬間である。

それから5年後、砂嘴の真ん中あたりに波止場が築かれ、首都に最も近い国際貿易港に指定された。港を中心にして、横浜村のあったところには外国人居留地が、反対側の半分には日本人町が形成された。居留地には外国商館が建ち並び、日本人町には幕府が誘致した有力商人達が店を構えた。

開国に反対だった攘夷派の浪士達が、外国人とみれば殺傷しようと思気込んでいる。そこで砂嘴の周囲を海と運河で囲み、橋にはすべて関門が設けられた。武器を持つ人間をチェックするためだ。この一帯をいまでも「関内」と呼ぶのは、関門の内側だったからである。

居留地には商館と同時にホテルも建った。経営者はもちろん外国人だ。年によって変動はあったものの、常時、10軒前後存在した。

中でも有名だったのが、明治三年(1870)創業のグ

ランドホテル。何度カリニューアルし、明治二十八年には旧館、新館あわせて客室360あまりという大ホテルに成長した。場所は海岸通りのもっとも山手寄り。大食堂、ビリヤード室、バー、海に面したバルコニーなどがあり、サービスも料理も洗練されていた。その評判は海外にまでとどろいていたという。

残念ながら、大正十二年（1923）9月1日に起きた関東大震災で、グランドホテルをはじめ、すべてのホテルが消失した。同時に、外国人の宿泊場所がなくなった。港都横浜はもう終わり、東京に合併される、という記事が全国紙に載った。

外国商社はこぞって神戸に拠点を移した。このままではほんとうに横浜がなくなる、と横浜の経済界、行政は危機感を募らせた。外国商社を呼び戻すにはどうしたらよいのか。まずは海外からの客を泊めるホテルだ。それも、復興のシンボルとなる立派なホテルを建てる。そして日本の玄関口としての「横浜」を、再度、世界にアピールしよう！

その思いを込め、官民共同で創建されたのがホテルニューグランドである。

○
オープンは大震災から四年経った昭和二年（1927）。よく混同されるのだが、グランドホテルとの繋がりはない。が、まったく関係がないかといえば、そうでもない。創建されたホテルは、名称を一般公募した。しかし、どうもび

んとくるもの
がなかったよ
うだ。

そこで内部か
ら「グランドホ
テルに負けず劣
らずの世界的な
ホテルに」とい
う声上がり、
あやかるかたち
でホテルニュー



1927年12月1日開業本館前
ホテルニューグランド提供

グランドになったという。

設計は渡辺仁。横浜開港記念会館、東京国立博物館、銀座・和光などの設計を手がけた新進気鋭である。皇族や英国皇太子を宿泊客に迎え、ニューグランドは外国人専用ホテルとしてスタートを切った。日本人はよほど地位のある富裕層か、ここの318号室を仕事部屋にしていた作家・大仏次郎のような著名人でなければ、泊まることはできなかった。



シーフードドリア
ホテルニューグランド提供
初代総料理長サリー・ワイル氏が体調
を崩した外国人のために即興で考案
した逸品

一流ホテルは提供する料理も一流でなければならぬ。

この時代、料理の最高峰とされたのはフランス料理。総料理長として迎えられたのは、パ

リの四つ星ホテルで料理主任も務めたというスイス人、サリー・ワイルだ。

ワイルは遺憾なくその才能を發揮し、舌の肥えたセレブたちを満足させた。それだけではない。日本における洋食のありかたを、彼は創り上げたのだ。

この頃、一流ホテル、一流レストランにおける洋食はコース料理以外、ありえなかった。客は正装。フォークやナイフの使い方、ワインの選び方まで、かしこまったマナーに従わなければならない。ワイルはこれを大胆に壊し、一品料理アラドをメニューに取り入れた。おなかの調子がまいちだという客には、メニューになくても、胃にやさしい料理を提供した。さらに、みずから客席を周り、気さくに話しかけ、料理の感想や意見に耳を傾けた。

「食事は楽しむもの」「コックは客の求めに応じて、どんな料理でも作れなければならない」「厨房はあくまで清潔に」。これがワイルの信条だった。彼のもとで洋食を学んだ日本の料理人達は、それを受け継ぎ、横浜を中心に、日

本の洋食文化を拡めていったのである。

○

しかし、平和な時は短かった。満州事変、日中戦争、太平洋戦争と、日本は暗い時代に突入し、ようやく終わったのは昭和二十年（1945）。8月15日に終戦を迎え、8月30日には敗戦国日本をアメリカの統治下に置くため、連合軍総司令官ダグラス・マッカーサーが厚木基地に降り立った。

彼はまっすぐ横浜に向かい、ニューグランドに入った。じつは明治三十六年（1903）、ウエストポイント陸軍士官学校を主席で卒業した年に、マッカーサーは日本を訪れている。昭和十二年（1937）には新婚の夫人を伴い、ニューグランドに宿泊した。お気に入りのホテルだったようだ。

終戦後の指揮をとるため、彼が三日間滞在した部屋は、本館の315号室。いまも「マッカーサーズ・スイート」と呼ばれている。

それから七年間、ホテルは接収され、米軍高級将校と婦人部隊の宿舎に使われた。横浜は空襲で焼け野原になり、日本人は衣食住すべてにことかく毎日だった。それを尻目に、米軍はホテルで連日、パーティーや映画会などを開催し、壁の装飾を剥がしたりペンキで塗ったりとやりたい放題。創業時からの宿泊名簿も無残に「ゴミ」として処分されてしまった。

喜劇王チャップリンや野球の大スター、ベーブ・ルースを始めとして、国内外のセレブがこのホテルで時を過ごしたというのに、その貴重な記録が消えてしまったのだ。残念でならない。

最近になって、倉庫から発見されたものがある。従業員が写したらしい戦前・戦中の写真が約300枚。大広間にハーケンクロイツの幕が掲げられたものもある。日本とナチス・ドイツは同盟国だったことを、あらためて思い起こさずにはいられなかった。

本館のリニューアル時には、紙が一枚入ったウイスキー

の空き瓶が、客室の屋根裏から出てきた。紙には、どうやらこれをここに隠した本人のものらしい名前が記されていた。接收中、ここに滞在していた米軍将校である。なにか自分の証を残して行きたかったのかもしれない。

接收解除後、部屋や大広間を元通りに戻すのに苦勞したそうだが、ニューグランドは再び、人々の憧れる非日常空間として甦った。日本人も外国人も居心地の良い部屋でくつろぎ、海を眺め、レストランやカフェ、バーなどで、美味しい料理やお酒を味わうことができる。

私は時々、本館二階にあるロビーで一人の時を楽しむ。ニューグランドブルーの絨毯とカーテンが、横浜家具と呼ばれる創業当時のソファやテーブルが、歴史のさまざまなシーンへと私を誘ってくれる。

ホテルには、ここを通り過ぎた人々の、さまざまドラマがある。ニューグランドのドラマは、ことのほか美しく哀しい。訪れるたびに、もっと知りたくなり、もっと語りたくなるのである。



ホテルニューグランド外観(開業時) ホテルニューグランド提供